

# 埼玉育ちのグローバル人

## 日本からロシア、そしてハンガリー



埼玉県マスコット  
「コバトン」

### 第2回 「モスクワ時代」

ロシア科学アカデミー・スラヴ学研究所研究員

木村 香織さん



言語は自分の意思を相手に伝える、または相手の意思を理解するための手段である。伝えるものがあったとしてもそれを伝えることができなくては意味がない。逆を言えば、伝えることはできても伝えるものがなくては意味がない。私は大学時代、常にそれを意識して勉強していた気がする。

私のロシア語への入り口は文学であった。特にレフ・トルストイのキリスト教的世界観に惹かれ、原文で読んでみたいと思ったのが、ロシア語を学ぼうと思った最初のきっかけである。次第に興味はロシア政治に移り、大学選びの際はロシア政治の専門家がいてロシア語が第二外国語で学べる学校に願書を出した。そして最終的に法政大学法学部政治学科に入学した。今では、他のどの大学でもない、この法政大学に行ったからこそ、私は現在ロシア語を習得し、好きな歴史を続けていられるのではないかと考えている。

よく、大学の第二外国語で学んだ程度では言語は習得できないと言う人がいるが、私はこの考え方は根本的に間違っていると思う。第二外国語で学ぼうが、外国語学部に入ろうが、語学学校に行こうが、どんな言語でも自分の意思を持って学ぶ姿勢がないと習得できない。どの言語でも、先生に教えてもらう授業を「1」とすると、家や図書館で自分で学習する時間は「9」である必要があるのだと思う。そして、

声を大にして言いたいのは、第二外国語の先生たちは、第二外国語の生徒だからと言って手を抜いて授業を行なっているわけではないということだ。要は自分が先生の教えてくれることを吸収する意思があるかないかで、言語習得できるかできないかが決まるのである。

私は、大学入学時の第二外国語選択で迷わずロシア語を選んだ。当時、法政大学のロシア語の先生達は本当に熱心に教えてくれた。その授業はとても面白く、ロシア語の授業が待ち遠しいほどであった。数年後にモスクワでロシア語の授業を受けた時、「あなたは基礎文法がしっかりしているね。そういう人は上達が速い。日本の大学でとてもいい先生に教えてもらえたんだね」と言ってくれた先生がいた。法政大学のロシア語の先生たちが最初のロシア語の先生だということが誇らしかった。

そんなロシア語の先生達が、私が大学1年生だった冬にモスクワ-サンクト・ペテルブルク旅行を企画してくれたのである。希望者を募り、憧れの地、ロシアに連れて行ってくれた。初めて見る真っ白な雪でキラキラのモスクワ、あの時の印象は20年以上経った今でも忘れられない。魅惑的なモスクワの建造物やバレエ・サーカスなどの文化、ロシアで日本語を学ぶ学生たちとの交流はとても刺激的だった。この時にぼんやりとはあるが、私はこれから先、ロ

シアと関わっていくのだろうか、いや、関わっていききたいなと思った記憶がある。

それ以降、大学在学中には夏と冬の長期休暇を利用してモスクワの語学学校に行き、ロシア語習得のための実践経験を積んだ。大学3年から4年次には大学の交換留学プログラムに受かり、奨学金を得てモスクワ大学で1年勉強する機会をもらった。実際にモスクワ大学の興味のある授業に登録し、ロシア人学生と一緒に講義を聞いた。この交換留学期間1年があったからこそ、大学卒業度すぐにモスクワ大学歴史学部の修士課程に入っても、大学の授業をロシア語で聞き、理解することができたのだと思う。



交換留学時代。友人と寮にて（筆者は右）

言語の事ばかり書いたが、法政大学法学部政治学科は面白い授業が沢山あった。国際法や国際政治、文化人類学、現代ロシア政治、ソ連・東欧史の授業はもちろんのこと、他の学部の授業も取ることができた。文学部の万葉集の授業は本当に面白かったのを覚えている。大学で学んだこと、その中から私はソ連史を特に掘り下げていききたいなと思い、研究者の道を志すことに決めたのである。法政大学での大学生活は、その後モスクワで修士課程・博士課程に入り研究をするための下積みの時代であった。

法政大学を卒業後、モスクワ大学歴史学部修士課程に正規に入学した。研究テーマは、「第二次世界大戦後のソ連とハンガリーの国際関係史」だった。このテーマを掘り下げたかった理

由は話せば長くなるが、かいつまんで言うと、法政大学在学中の交換留学時代にハンガリーに旅し、そこで友人になった人に「ハンガリーの各家族には、1つは必ずソ連が関連する悪い話・悲しい話がある」ということを言われたことが一番大きかったと思う。この言葉を聞いて、私は『「各家族に1つ」というのは本当なのだろうか。そう言い切ってしまうのだろうか。彼にそう思わせてしまったのはなんだったのか。それを知りたい』と思った。交換留学から帰ると、法政大学を卒業するまでの間に1956年のハンガリー「革命」（ハンガリー一動乱）のことを調べ、卒論として提出した。そしてその時に、そのそもそもこの1956年ハンガリー「革命」が起こった経緯はなんだったのか、ヨーロッパ視点の研究や回顧録はたくさん出ているが、ソ連側の視点がいまいち見えてこない。このテーマをソ連（ロシア）の文献や公文書館史料を読んで掘り下げていきたいと思ったのだ。

海外の大学で修士課程・博士課程を修了し、博士号を取得したというと驚かれるが、一つのことをやり遂げるには何事も根性があることが最重要項目であると思っている。研究に関して言えば、修士号・博士号は一つの通過点であり、それを持っているからと言って何かに到達したわけではない。探究心・研究対象に対するある種の愛・折れない心、そして根性があることが、研究を続ける上での何物にも勝る資質なのだと思う。

モスクワでの日々は充実していた。大学の授業や勉強の他に、家庭教師のバイトや趣味の剣道をした。途中、剣道からスポーツチャンバラに転向したが、常に週に2~3回の頻度で稽古を続け、そのおかげでフィットネスクラブでバイトをすることもできた。子供の頃からやってきた剣術の知識（技術）をモスクワでも活かすことができ嬉しかった。適度に体を動かしていたから、ストレスで気が滅入るということもなかったのではないと思う。



イタリア・ファエンザにおいて初の国際学会への参加  
(筆者は中央)

もちろん大変なこともあった。最初の指導教官とは修士号取得直前にうまくいかなくなり、一度大学を退学させられた（すぐに復学できたが）。しかし、救いの手は差し伸べられるものである。それと同じ時期に、たまたま出会った他学科の教授（モスクワ大学歴史学部南・西スラヴの歴史学科学科長）が話を聞いてくれて、私がやりたい研究内容を理解してもらうことができ、ロシア科学アカデミー・スラヴ学研究所所属のハンガリー研究者を指導教官として紹介してくれた。実は、この研究者の著書は法政大学時代に既に読んでいて、モスクワでは彼に指導教官になってほしいと思っていたのだから、所属が違うため叶わないと思って諦めていた。あのタイミングで教授と出会い、話を聞いてくれたから私の今がある。この教授には感謝してもしきれない恩がある。

チャンスは常に巡ってくる。そのチャンスを掴めるか掴めないかは、自分がそれを掴める準備できているかできていないかに関わってくる。あの最初の指導教官とうまくいかなくなり、退学させられたタイミングで他学科の教授と話すことができ、自分のやりたい事を正確に伝え、わかってもらえたのは奇跡だとも言えるが、何も無いところに奇跡は起きない。日頃から自分のやるべきことをやっていることが大切なのだと言った一件であった。

その後、所属していた学科から教授の学科に移り、博士課程に進学した。そのままロシア科学アカデミー・スラヴ学研究所所属のハンガリー研究者である私の恩師が指導教官としてついてくれて、博士課程3年間は研究に集中することができた。そして2013年、無事に博士号を取得したのである。



在ロシアハンガリー文化センターにおける学会発表  
(左が筆者。中央は恩師)

私の育ってきた環境は恵まれていると言える。両親がモスクワで学ばせてくれたこと、それがなければ今の私はいない。両親には本当に感謝している。両親が援助してくれていた分、途中退学は許されない（許されないのは周りからではなく、自分が自分を許せなくなるという意味である）。常に自分にそう言い聞かせていた。私のモスクワ時代はとても充実した時代であった。